愛知老人コミュニティーセンター　ニュース

「まきば」通信

第2号

日本基督教団
愛知老人コミュニティーセンター
〒470-0111　日進市米野木町南山987-88
TEL. 0561-74-5548
FAX. 0561-74-5561
ホームページ　http://www.mb.ccnw.ne.jp/makiba
E-mail　makiba@mb.ccnw.ne.jp
発行日　2002年11月24日
発行人　森岡　廣實
イラスト　篠田　潔

キリストの老人ホーム

日本基督教団中部教区
愛知老人コミュニティーセンター委員長　**藤掛 順一**

有料老人ホーム「まきば」は、宗教法人日本基督教団のセンター活動の一つとして、中部教区の責任のもとに設立、運営されています。つまりこの老人ホームは、宗教法人立のホームなのです。このような形での運営には、いろいろと不便な面があります。法的には教団のものであり、責任は中部教区が負うのですから、何かを決断する時には、教区の総会あるいは常置委員会で決議し、それが教団において承認されて始めて有効となるという、面倒な手続きが必要なのです。教区の常置委員会は年に三回です。ですから会社のように小回りのきく動きができません。即断即決というわけにいかないのです。

設立当初から、このような形での運営は当面の暫定的なことで、なるべく早くもっと老人ホームの運営に適した体制に移行することを願い求めてきました。しかし、現在までのところそのことは実現していません。なおしばらくは宗教法人立で歩むことになります。

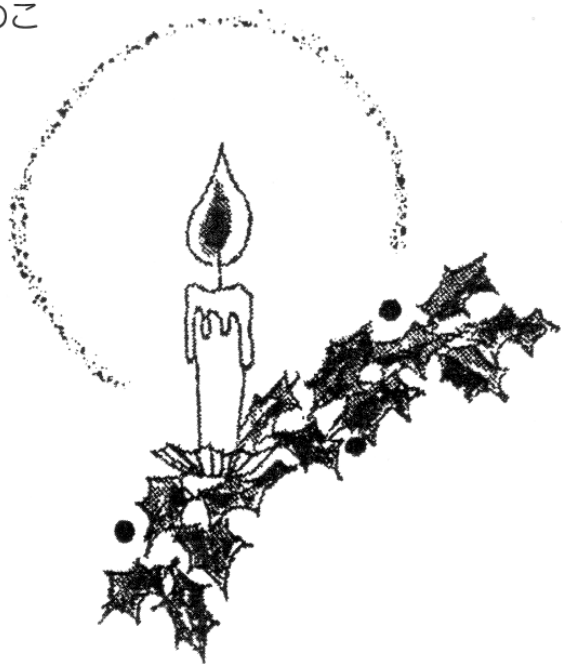
このことは今述べたように不便な一面もありますが、しかし私たちは今そのことを、神様から与えられた必要な期間として積極的に受け止めたいと思います。宗教法人立ということは、これが教会の業であるということです。教会と密接に結びついた「キリストの老人ホーム」として「まきば」がしっかりと歩めるように、教区諸教会が一丸となって祈り、支えていきたいと願っています。

「まきば」での介護の日々
—“助け合い”の尊さの上に立って
介護リーダー
野中 江里子……2・3

「まきば」のあるテーブルのひとこま
朝倉　和代……4

老いを楽しむ
大隅　啓三……5

“施設長”の「まきば」報告
施設長・館長
森岡　廣實……6



「まきば」での介護の日々 ―“助け合い”の尊さの上に立って

介護ーダー　野中 江里子

「まきば」において、要介護認定を受けられた入居者の方々の介護を、私たち介護者が行っております。それぞれの方の心身の状況、希望などを勘案してケアプランが作成され、プランに基づいた介護を実践しております。そして、介護サービスの内容には、身体介護として食事、排泄、入浴等の介助があり、家事援助としては、居室掃除や洗濯等を行っております。要介護者の中には、居室掃除のサービスのみを受けていらっしゃる方もおられますし、中には、身体介護、家事援助全般にわたりサービスを受けていらっしゃる「全介助」の方もおられます。居室はすべて個室でありますから、介護者が各居室に訪室し、個別的な介護を行っています。現在、昼間10名、夜間10名の職員が、ローテーションを組み、介護にあたっております。

入居者の方々には、それぞれの今まで生きてこられた歴史があり、長い人生の中で培われたそれぞれの考え方、生活習慣を持っていらっしゃいます。各々の個を理解し、受容する、そして尊重するということが、介護に取り組む上では、大切なことだと考えます。日々、ケアマネージャー、看護、介護のスタッフ同士が検討しあいながら、その方にとってのより良い介護の追求を行っています。時として、入居者の方が体調を悪くされ、気持ちが落ち込まれた時、私たち介護者の働きかけにも増して、他の入居者からの励ましのお声かけがきっかけでお元気になられるということがあります。そのような場面に接します時、「まきば」において入居者同士で自然になされている「助け合い」の尊さを再確認します。

ロビーの入居者の方々の“作品”展
……一寸したギャラリー風

朝のスタッフミーティングの風景

玄関横のお花鉢植等

食堂での食事風景……語らいに力が入るとき

訪問販売の風景……楽しい一時

南側の花壇……汗を流す場所

私が最近読みました日野原重明氏の「生き方上手」の中で、看護者にとっての他人の痛みに共感できる感性の必要性について触れられていました。このことは介護者にとっても当てはまることだと思います。人が老いていく過程において生じる悲しみ、寂しさ、ストレスといったものに共感できる気持ち、感性が、介護者には必要だと思います。

「体験によって感性は育つ」と日野原氏は本の中で書かれていました。介護者の感性を鈍らせることなく、磨くことの努力を続け、日々、問題意識を持ちながら介護に取り組むことで、より良い介護の実践を行っていきたいと思っています。そして入居者の方々は終の棲家としてここ「まきば」を選ばれたわけであり、そのことを思いますと、職員として日々の仕事における責任の大きさを感じます。入居者の皆様方に「まきばに来てよかった」と思っていただけるサービスの提供をすることに努めたいと思います。

「まきば」のあるテーブルのひとこま

入居者　朝倉 和代

「まきば」に入居してからはや5年有余“終のすみか”として、落着いてマイペースの日々を送っております。毎食の食堂での場所は自由となっておりますが、いつの間にか暗黙のうちに決まり、私たちのテーブルは、男性4名、女性1名のメンバーでいただいております。平均年齢82.4歳、男性3名の方は奥様を先に送り、お一人住まいです。この頃のこのテーブルのこもごもを記してみます。

Sさん、突然の腹痛、入院、一週間の絶食治療、二週間後には退院、ともに食卓を囲み、おしゃべりしながら食事のすすむことを願いながらいただいております。時にはSさんの新作の俳句を聴きながら、心境をうかがい、傾聴の時をすごします。

Nさん、暫く前より体調不良を口にし、医師より入院検査をすすめられていらしたのに、決断がつかず、不安を訴えていらっしゃいました。ある日突然の入院、酸素吸入のため可動範囲の制限があり、辛かったとのことですが、二週間後には退院、自室に酸素吸入器を取付け、吸入していらっしゃるとのこと。一週間程同じテーブルで食事を共にいたしましたが、再度入院、三日後には退院、自室でお過ごしです。

Hさん、満身創痍の方で、年2～3回入院していらっしゃいましたが、ある日曜日の朝、食事前に礼拝出席のため、チャーチバスの予約の申し出をされ、お元気と思っておりました。食事中左手の動きがぎこちなく、いつも端正な方がおかしいと思い、チラチラ見ていました。軽い脳梗塞？ヘルパーさんに耳打ちすると、テキパキとことを運び、自室にて静養される。本人はすでに容態をご存知とのこと、主治医の指示により三日後に入院、三週間後には退院、同じテーブルで食事を共にいたしております。

私も昨年夏の終わりに、肺炎で三週間入院いたしました。

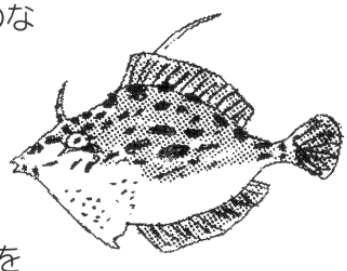
これが私たちのテーブルの方々の年を重ねつつ生きる現状です。「まきば」に住み、精神的にも、肉体的にも支えられ、恵まれていると感謝しています。しかし、職員の定着率が低く、名前を覚え、お話が出来るようになると、辞任の挨拶。この職員なら、私を理解してくださり、最後の看取りをしていただきたいとの思いの中での出会いと別れです。どのようになりますことか、希望をのべながら、ゆだねてゆきたいと思っております。

老いを楽しむ

隠退教師・元中部教区総会議長　大隅　啓三

ある友人が金沢に遊びに来て、こんな話をした。彼はその当時テレビや映画で脇役であるが、多少その名を人に知られていた。

能登に案内して、そこの漁師たちから舟と海の話を聞いたあとで、彼は述懐した。「俺たちは漁師役をやるというと、直にねじり鉢巻をして威勢をつけるようにみせるが、本物の漁師さんは帽子を被っているものなんだな。その方が海上では都合がいいらしい。」と言い、役作りの難しさを説明した。



その折りに、「老け役をする時は、背中をやや猫背にして腰を曲げ気味にしてやるものだと若い頃は思っていたが、実際の老人は背中をしゃんとしているね。」老人のみんながみんな無理して曲がり気味の背筋をピンと伸ばし気味にしているわけではないだろうが、確かに「まだ若い者には負けないぞ」と言った思いで意識してシャンとする傾向に私たち老人はなりがちのところがある。

それはそれで老化に抗するという効用がない事はないので、それなりの意義があるかもしれないが、「年寄りの冷や水」になりかねない。そこで箴言に聴きたい。

「白髪は輝く冠」（16章31節）とある。わが頭が輝いているかどうかは判然としないが、真っ白になっていることだけは確実である。従って、電車やバスに乗り、老人優待席の前に立って物欲しそうな顔をしなくとも、一般席に立っていると、席を譲られる場合が少なくない。これは白髪の者は老人であり、助けたいという志の表れであるに違いない。そのご芳志を有り難く頂戴している日常で、人の情けを感謝している。

もちろん、老人といえども、斎藤実盛の如く死出の戦の庭に発つのに白髪を真っ黒に染めて出て行くという場合もあるに違いないが、それは万が一の折であろう。

ある集会の席で、小学生が「おじちゃん（おじいちゃんと呼んだのを聞き違えたのかもしれない）、その髪の毛、染めたの？」と質問した。茶髪や金髪がのし歩く昨今、白髪も染め毛の一つと思い違っても仕方がない。彼にとっては白髪も珍奇なものだったのである。

白髪によって表されている老いにはさまざまな支えと特権がある。おまけに十分な時間がある。いや忙しいと言ってもあらかたが自分で設定したものであり、現役時代のように他から強いられたものではない。かくて老いを楽しめる。

“施設長”の「まきば」報告

施設長・館長　森岡（もりおか）　廣實（ひろみ）

「まきば」の周りの自然はそれぞれの季節によってその彩りをかえます。秋が深まり、木々も葉を落とし、大地の草も枯れて、すぐそばに寒い冬が近づいていることを知らせてくれます。「まきば」の窓からこの変化を見て、私たち「まきば」の住人も、心の中の冬支度をするのです。

皆様のお支えのうちに「まきば」では、入居者の方々のいろいろなお世話をさせていただいています。その中で「まきば」では、この1年いろいろなことが起こりました。 90歳を超えるお二人の方がそれぞれの長い人生に幕をひかれ、天に召されました。また定年退職をされた娘夫婦と一緒に住みたいとの希望で退去していかれた方もいます。しかしその後すぐに、お二人の方が新しく入居されました。

現在、「まきば」では男性12名、女性33名の在所者数になっていて、総数で45名になります。平均年齢は80.4歳ですが、その内90歳以上の方が5名です。女性が4名で男性が1名です。最高年齢者は女性で94歳です。また、5名のうち3名の方はほぼ自立をされておられます。

現在、入居者の方々の楽しみと一つは買い物ツアーで、「まきば」の車で一日2回または3回に分けて日進市内にあるスーパーなどに出かけ、ショッピングを楽しんでおられます。また、10月に行われた特別プログラムは、AHIにネパールやフィリッピンなど、アジア各国からこられた研修生たちとの交流でした。

かつて、日本もそうであったように、子供が親の世話をするのが当たり前と今も思われているアジアの国々からこられたほとんどの研修生にとって、有料老人ホームを持つ今の日本の社会のあり方そのものを理解するのはなかなか難しい様子で、いろいろと深い内容の話し合いが出来て、とても有意義なときを持つことが出来ました。その他にも，春や秋の行楽に出かけたり、誕生日会には、いろいろの催しを楽しんでいます。

有料老人ホームでは、2002年10月1日より新指導指針が発布され、今までの類型が破棄され、新しく3つの類型が示されました。それによると有料老人ホームは、介護付有料老人ホーム、住宅型有料老人ホーム、それに健康型有料老人ホームとなっており、「まきば」は介護付有料老人ホームとなります。

「まきば」の介護においては今までと何ら変わるところはありません。ただ、介護保険の取り扱いの中で今までは国保による、一割給付金を越える上乗せ分を都度徴収方式で徴収していましたが、県の指導のもとに介護度別一律定額方式に変更するよう、現在準備をしているところです。

「まきば」も設立より6年目となり、いろいろの面で充実しなければならないときを迎えています。入居者、職員、また「まきば」の運営そのものにおいても、安定と確実さを必要とされています。そのためには、「まきば」に連なる多くの方々の支えによってのみ出来ることだと思います。
これからも、皆様のお支えをよろしくお願いいたします。

編集後記

今回もセンター推進委員会のみなさまのお力によって、「まきば」通信2号の発行が可能になりました。今回の「まきば」通信では、「まきば」の中のことを知っていただきたくて、いろいろと工夫をしてみました。

もっと「まきば」を知っていただくために次号からは、入居者の声や自由投稿の欄を設けて行きたいと思っています。 是非とも皆さんが「まきば」に関心を持っていただき、これからもいろいろと支えてくださいますように、よろしくお願いいたします。　（施設長　森岡廣實）